



Malawi Voice vol.8

～アフリカの国・マラウイからのおたより～

青年海外協力隊 平成27年度3次隊
言語聴覚士 飯田知美

ごあいさつ

9月にマラウイでは新年度を迎えました。マウンテンビュー聴覚障害児特別支援学校でも新入生を迎え、それぞれ新しい学年、新しい教室で授業をスタートしています。この学校に配属されてから、早いもので8ヵ月、気づけば任期の三分の一以上が過ぎていました。

そして、私事ながらマラウイの地で30歳という節目の歳を迎えました。0歳の誕生は鳥取(母の実家)で迎え、10歳の節目は地元大阪(小学生)、20歳の節目は広島(大学生)で迎えました。小学生だった10歳の頃、はっきりとした記憶はありませんが、「将来はバスケットボールの選手になりたい」という気持ちに徐々に変化が表れ「こんなに身長が低い自分が選手になれるはずがない」と早くも夢をあきらめていた頃でした。20歳の頃、言語聴覚士を養成するための学科に在籍していたため、すでに数年後には言語聴覚士として仕事をするには考えていましたが、まさか10年後に自分がアフリカの地で生活することになるとは全く思っていませんでした。「これもしてみたい」「あれもしてみたい」といろいろなことを思い描いてはなかなか一歩を踏み出すことのなかった自分ですが、いろいろな方との出会いや支援に導かれて今日を迎えることができました。10年ごとにこんなに自分や自分を取り巻く環境が変化するなんて、人生は本当に何が起きるか分からないものですね。

広島で難聴のお子さんと過ごしていた頃、年中・年長のお子さんを担当することが多かったこともあり、“将来の夢”の話題に触れる機会がたくさんありました。「警察官」「サッカー選手」「先生」「プリキュア」等、どこまで“将来”という言葉を理解しているかはわかりませんが、一人ひとりが保護者の方と自分の将来について語り合い、いろいろな思いを語ってくれました。アフリカに来ることが決まった頃、「アフリカの難聴児にも夢があるのだろうか…?」と考えたことがあります。マラウイに来て実際に難聴の子ども達と会話をしている中で、「いつか看護師になりたい」「お母さんと同じ仕事がしてみたい」「ブランタイヤ(マラウイの大都市)の店で働きたい」などなど、将来の夢を語ってくれました。日本とは異なり、まだまだ障害に対する理解や、福祉制度は進んでいませんが、この先も難聴の子ども達が夢や目標を持ち続けられるような国であってほしいと願うばかりです。次の節目の10年後、私やこの子たちの目の前にはどんな世界が広がっているのでしょうか。

2016年10月
飯田知美



“マラウイの聴覚障害児の夢”




以前インターネットで、「最近の小学生の将来の夢」のコラムを見ました。私が小学生の頃には思いつきもしなかったような横文字の職業名（パティシエ、クリエイターなど）を見て驚きました。国が違うとどのくらい“将来の夢”に違いがあるのでしょうか。さっそく生徒たちにアンケート調査をしてみました。中には恥ずかしがって「本当か？」と思う回答（特に男子）もあります。

まず、いろいろな情報（インターネット、TV、直接質問）を総合して、日本の幼児・小中学生の将来の夢で上位にあがった職業のリスト（男女別）は、以下の通りです。

日本の子どもの将来の夢


男子

- ・サッカー選手
- ・科学者
- ・パイロット
- ・医者
- ・警察官
- ・ゲームクリエイター
- ・漫画家
- ・アニメのキャラクター（仮面ライダー、レンジャー）
- ・建築家
- ・電車の運転手



女子

- ・パティシエ
- ・医者
- ・保育士、幼稚園の教諭
- ・アイドル、歌手
- ・デザイナー
- ・スポーツ選手
- ・建築家
- ・ケーキ屋
- ・女優
- ・教師
- ・美容師、メイク



いかがでしょうか。私と同世代の方だとカタカナの職業名の多さに驚きませんか？ただ、男子の「サッカー選手」「アニメのキャラクター」や女子の「保育士」「ケーキ屋」などは、私が小さい頃にも周囲で耳にしたことがありました。一方で「科学者」「ゲームクリエイター」「デザイナー」「建築家」などが上位にいることは世代の違いを感じてしまいます。

それでは、次のページで本題の「マラウイの聴覚障害児の将来の夢」をご紹介します。少しイメージのつきにくいものもあると思います。男子生徒 32 名、女子生徒 25 名に回答してもらいました。女子の人数が少ないのは、今年度は高学年の女子生徒が少なく、質問の意味が理解できる生徒が少なかったためです。

マラウイの聴覚障害児の将来の夢

男子

- ・店の店員（5名）
- ・銀行員（4名）
- ・自動車整備士（3名）
- ・大型トラックの運転手（3名）
- ・サッカー選手（2名）
- ・警察官（2名）
- ・電気工事する人（2名）
- ・大工（2名）
- ・PCを使う仕事（2名）
- ・水道局員（1名）
- ・画家（1名）
- ・バイクタクシーの運転手（1名）
- ・農業手伝い（1名）
- ・服染色の仕事（1名）
- ・バイクレーサー（1名）
- ・軍隊（1名）
- ・医師（1名）



女子

- ・服を売る人（9名）
- ・店の店員（7名）
- ・医師（2名）
- ・PCを使う仕事（2名）
- ・医療従事者（2名）
- ・看護師（1名）
- ・警察官（1名）
- ・自転車タクシーの運転手（1名）
- ・美容師（1名）
- ・調理師（1名）
- ・自動車整備士（1名）



男子も女子も、「店の店員」というのが上位にいますが、仕事内容を尋ねるとレジ打ちではなく、マラウイにあるスーパーで棚卸作業などをしたい（レジは聞こえないから難しい）とのことでした。「銀行員」はマラウイで給料の高い人気職種の1つです。「PCを使う仕事」は、日本でいう一般事務職といったところでしょうか。「服染色の仕事」は、服を染色する機械（工場？）のようなものがあるそうです。「医療従事者」と答えた2名は、とにかく病院で働きたいとのことでした。ちなみに、マラウイでは聴覚障害者が車の免許を取得することができないそうで、「トラック運転手」という仕事は現時点ではかなわない夢です。それでも車が好きな子が「自動車整備士」に憧れるようです。

このアンケートはあくまで世間話の合間に口頭（手話）で尋ねたものなので、どこまでが本心なのかは怪しいです。中には、熱心に理由を語ってくれる生徒もいましたが、一方で他の生徒の意見を聞いて「じゃあ私も…」と変更したり、“将来の夢”という質問の意味が理解できない生徒もいました。全体的な印象としては、マラウイにはテレビ等の情報メディアがあまり普及しておらず、彼らは聴覚障害児のため、これまでの人生で直接目にする身近な職業が多いと思いました。そんな中、毎日接する「教師」が全く出てこないのは、教師と生徒が日頃あまりいい関係性を築けていない象徴のような気がして、少し残念に思います。実際にマラウイで聴覚障害を持つ人々が大人になってどのように生活をしているのかは分かりません。また追々調査してみたいと思います。



9月の活動の様子



9月5日に新学期を迎え、前回の休み明けと同様に約1週間かけて少しずつ生徒たちが学校に戻ってきました。新たに14名の新生入生（内2人は通常小学校から転入？）を迎え、学校が少しにぎやかになりました。

前タームまでは活動らしい活動ができず、もともと配属先から要望されていた個別指導や教材作成もほとんどできませんでした。そして始まった新しいターム。「今タームこそは前進しなくては…」という焦る気持ちと相変わらず語学の壁に悩まされるばかり。前進するために校長と相談する時間を取るうにも、来客が多くほとんどあいさつしかできない状態が続きました。

朝から放課後まで、新たに与えられた「Speech Room」で一人黙々とパソコン作業をする日々が続き、9月はマラウイに来て一番苦しい1ヵ月になりました。

そんな中、何もせずに過ごすわけにもいかないのので、出国前に前職場から寄付していただいた補聴器をプライマリースクールの数名の生徒に対して使用開始しました。配属先の学校では、ほとんどの生徒がプレスクール時代に補聴器を寄付されたはずですが、その補聴器をその後使用している生徒はいません。生徒、教員と補聴器の話題をしてみても、

「補聴器が良いもので使った方がいいとは知ってるが、管理が面倒なうえ、効果を実感できていない」
「ヘタに使用して寄付されたものを壊したりなくしたりできない（耳鼻科医の定期健診時に補聴器の状態をチェックされる）」

という現状があり、【教員が使うのをためらう→たまにしか使わない補聴器で生徒も教員も効果が実感できない→そのまま倉庫へしまっておく→プライマリースクール進学時に生徒に渡す→なくなるか壊れる】という悪循環。このままでは私一人が「補聴器使おう！」と意気込んでみてもどうにもならないと思いました。そこで、実際の効果を少しでも実感してもらえるようにと、今回の活動を決めました。対象は、前回行った聴力検査の結果が比較的よい、または日常生活の様子から、よく声を出している生徒。そして、上級生で補聴器の管理ができそうな生徒を選びました。パワーポイントを使って管理の仕方や、注意事項、

何のために使用するのかということを手話で説明しました。その後は定期的に聞き取り検査（母音、数字、単語等）をしたり、なるべく見かけた時には話しかけるなどしています。装着してすぐに効果は現れないのは当然日本と同じです。焦らず根気強く進めていきたいです。



～ 生活風景 ～

日本から大学生の方が遊びに来てくれました。国際協力に興味があり、大学の夏休みを利用してマラウイに来られたそうです。私とは直接面識はありませんでしたが、同期隊員の紹介でマウンテンビューまで来ていただきました。まだ授業は始まっていなかったため、実家から戻ってきた数名の生徒達と交流してもらいました。昼食のシマ作りはせっかくなので生徒から直接指導。マラウイの手話が分からなくても身振り手振りでコミュニケーション。



生徒が学校に戻ってきました。普段は「ちょっとは一人にしてくれ」と思うこともありますが、いなくなると寂しい…。みんなおかえり！



新入生のクラス（Standard 1-A）の授業風景。下は Standard 1-D の教室の様子です。改装工事が終了した新しいプレスクールの校舎はアフリカにいることを忘れそうになるくらいとてもきれいです。



新 Standard 8（最高学年）のメンバーです。いつも話し相手になってくれたり、分からない手話を教えてくれます。



木曜日は毎週「スポーツの日」。授業が終わった3時から、男子はサッカー、女子はネットボールをします。しかし9月22日はなぜか全生徒がホールに集まり、何やらイベントが行われていました。学校のどこに保管されていたのか、パズル・縄跳び・卓球・凾などが次々と生徒に渡され、「おもちゃで遊ぶ」イベントでした。目的や寄贈元などの詳細はよくわかりませんが、生徒達は大喜びでした。卓球に関しては、大人（先生、教育実習生）たちが一番楽しみ、大盛り上がりでした。

～ おもちゃで遊ぼうデー ～

